

## 軽度発達障害の理解と支援

平成 24 年 7 月 17 日 院内勉強会

小児科 横溝裕子

軽度発達障害の認識が進み、診断を受ける子供達が飛躍的に増えている。

自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動障害、学習障害を主として、全児童の約 1 割がその特性を有すると言われる。

明らかな「遅れ」は無く「偏り」や「歪み」が中心であるため、見た目には健常児との違いがわかりにくく、本人の困り感に周囲が気づくことが難しい。そのため不適切な対応をされやすく、失敗や叱責を繰り返すことにより自尊感情が低下し二次障害をきたしやすいことが問題である。

診断を受けることは、子供の特性を理解し支援の方法を知るうえでの第一歩となる。

発達障害の原因としては遺伝的要因が大きい。それに環境要因や周産期異常が加わるとリスクが増大する。しつけや愛情不足によるものではなく生来の脳機能の偏りが原因である。脳内の各部位に解剖学的・機能的変化や神経伝達物質レベルでの異常を認める。

故にそれぞれの発達障害は重なり合うことが非常に多く、うつ病との関連も強く言われている。

これらの子供達には、環境調整も含め心理社会的治療をベースとした包括的治療が生涯にわたって必要となる。

当院では言語訓練やソーシャルスキルトレーニングなどのリハビリ（療育）に取り組んでいる。幼稚園や学校との連携を図り、必要に応じて薬物療法も行っている。

自分の特性を理解し、その特性による機能障害を少なくする、また持っている機能を最大化することが発達障害の共通した治療ゴールと言える。

自尊感情を高め二次障害を防ぐことも全ての子供達共通の課題である。

## 発達という現象—適応について

平成24年7月17日 院内勉強会

医局 佐竹 孝之

小児のリハ（療育）の仕事に長年かかわってきて、子供の発達という現象につき考えることが多かった。今回その一部をお話しし皆様の参考に供したい。

環境との相互作用で、より良い環境への「適応」で発達が進む。環境との相互作用の機序では感覚—運動の過程が働いているが、感覚の面に注意を向けて、その過敏性や偏りに注意しながら対象となる子供たちがどの様に感じているかということに意識しながら接することが大切である。

小児のリハビリテーション — 第7回誠愛院内勉強会（平成24年7月17日）

小児部門・名誉院長 黒川 徹

演者と演題 1) 横溝裕子（小児科医）：軽度発達障害の理解と支援、2) 佐竹宏之（整形外科医）：イ）発達という現象について、ロ）「適応」と「再適応」の意義、3) 黒川徹（小児科医）：当院の自閉性スペクトラム障害の原因、症状、治療法。ここでは3)について述べる。

小児の外来患者実数は、平成15年度330人、平成19年度820人、平成22年度1,048人、平成23年度1,127人と著増してきた。平成23年度小児延患者数は27,055人で、内訳は自閉症スペクトラム障害・ADHD等の発達障害29%、精神遅滞16%、脳性麻痺23%、ダウン症・染色体異常8%、言語遅滞5%、筋ジス群2%、その他17%であった。

これらの疾患を発症する危険因子は言語障害、広汎性発達障害、注意欠陥多動性障害においては不明、ついで家族性因子、運動障害、精神遅滞、精神運動遅滞においては先天性（つまり妊娠中異常）、脳性麻痺は周生期因子がもっとも多かった。発達障害は増加している。その理由は不明であるが、母親或るいは父親の高齢化、妊娠中のアルコール・喫煙、環境汚染物質・都市化、人々における発達障害に対する認識のたかまりが言われている。

自閉症スペクトラム障害の症状は対人相互作用障害、コミュニケーション障害、想像の障害（こだわり、感覚入力の異常）が言われている。当院の症例においては対人相互作用障害は67%にみられ、人に無関心、興味がない、一人遊びが多い、他児と遊ぶことがない、人にさわりたいがる、いじめられやすい、不登校、かんしゃく、パニック、他傷、自傷、奇声を発するなどであった。感覚入力の障害は74%にみられ、味覚異常、偏食、音に過敏、触覚異常などであった。優れた才能もあり、3歳で40カ国以上の国と国旗を知っている、平成何年何月何日は何曜日かと聞けば何曜日とすぐ答える、一度耳にはさんだ電話番号、車のナンバー、通院の予約日など絶対に忘れない、野球やサッカー選手の名前は全部覚えているなど特異才能があった。

自閉症スペクトラム障害に対して当院で行っているリハビリは言語訓練71%、認知訓練68%、遂行機能訓練61%、コミュニケーション訓練50%等であった。運動感覚機能訓練、集団コミュニケーション療法ほかいろいろの方法がとられている。薬物療法もADHD、アスペルガー障害を含む自閉性スペクトラム障害に有効であった。自閉症スペクトラム障害の小学校入学後の状態は、普通学級、支援学級、支援学校等いろいろであった。

発達障害の子育て法は1) 健康：早起き、栄養、運動、2) 愛着の形成：可愛がる、こどもの訴え・話に耳を傾け、受け止める、3) スモールステップ：つまり少しの進歩を見つけて、絶えずほめる、失敗には触れない、4) 基本的身近自立：起床・就寝、食事、遊び、勉強の時間・場所を決めて一定化する、手順を教える、5) ノンバーバル（ことばに出ない気持ち）を読みとってコミュニケーション能力を高める、などである。これらは普通のこどもを育てるときにも役立つ。

